Tulips University of Tsukuba Repository

静嘉堂文庫所蔵鈔本『御覧詩』について

著者	大橋 賢一
雑誌名	中国文化 ： 研究と教育
巻	60
ページ	69-80
発行年	2002-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00150373

静嘉堂文庫所蔵鈔本『御覧詩』について

大橋賢一

一

『御覧詩』は、憲宗李純の勅命によって令狐楚（七六六～八三七）が編纂したいわゆる唐人選唐詩の一つであり、令狐楚より一世代前にあたる大曆、貞元期の詩人李益、盧綸など三〇名の近体詩、三百首弱が収録されている。[1]

現存する『御覧詩』の主な諸本については、傅璇琮「御覧詩前記」（『唐人選唐詩新編』陝西人教育出版社、一九九六）に簡潔にまとめられており、そこには、（1）明万曆四十七年（一六一九）に鈔写された、呉県の趙均（一五九〇～一六四〇）[2]鈔校本（北京図書館善本部所蔵、以下趙均本と略称）、（2）崇禎元年（一六二八）刊、常熟の毛晋（一五七九～一六五九）汲古閣刊『唐人選唐詩八種』所収本[3]（以下毛本と略称）、（3）汲古閣本を底本とした排印本（『唐人選唐詩十種』所収、上海古籍出版社、一九七八）の計三本が挙げられている。なお『唐人選唐詩新編』所収の『御覧詩』は、何焯批校及び傅増湘跋文を録する汲古閣本（北京図書館所蔵）を底本としており、[4]何焯並びに趙均の校記が付されている（以下新編本と略称）。新編本には毛本と趙均本の文字の違いになどに関する注があり、新編本を通して趙均本の形を概ね知ることができる。

「御覧詩前記」が触れていないテキストのうち比較的見やすいものとしては、文淵閣四庫全書本、また日本の文政七年昌平坂学問所刊本がある。[5]この二本は毛本を底本としているから、『御覧詩』の諸本を考えようとする場合それほど重要なテキストではないともいえよう。[6]しかし、静嘉堂文庫には、『御覧詩』の諸本を考える上で無視することのできないと思われる鈔本『御覧詩』が収蔵されている（以下静嘉堂本と略称）。

その方罫紙の様式は、寸法二四・一×一七・四cm、左右双辺、有界、毎半葉九行、版心白口、単白魚尾、毎葉の耳格には隷書で「馮氏家蔵」と印刷されており、毎行一八字となっている。また、目録（毛本でいう「姓氏総目」）二葉、本篇五七葉に分かれており、目録一葉表には下から順に印が「子晋」「静嘉堂珍藏」「宋本」「帰安陸樹声蔵書之記」と、本篇一葉表には「静嘉堂珍藏」「馮氏蔵書」「南斎」と、更に本篇五七葉裏には「馮彦淵収藏記」と、いずれも篆文で計八つ捺されている。[7]「南斎」の印は誰のものかは不明。静嘉堂の蔵書印を除く「南斎」以外の蔵書印の中で最も新しいものは、陸心源の息子、陸樹声のものである。静嘉堂は一九〇七年、陸心源の蔵書を購入しており、この印記は本書が確かに陸氏の旧藏であったことを示すものである。「子晋」は毛晋の蔵書印で、彼の字である。「馮彦淵収藏記」は明末の文人馮舒（一五九三～一六四九）、馮班（一六〇二～一六七一）の弟、馮知十の蔵書印で、彦淵は彼の字。生卒年は未詳である。

毎葉の耳格に「馮氏蔵書」と刻されていること、また「馮氏蔵書」「馮淵源収蔵記」という印記が見えることから、静嘉堂本は馮氏一族の手によるものであったと考えられる。[8]とすれば、伝播の順序としては馮氏が鈔写した後汲古閣に収められたと考えるのが穏当であろう。また、静嘉堂本に捺されている「宋本」という印は、『中国蔵書家印鑒』に毛晋の印として記載されているものと類似しており、陳先行『中國古籍稿鈔校本図録』「鈔本」に載る毛晋影宋鈔本『類篇』にもそれとよく似た「宋本」という印が捺されている。同じく同書に載る毛晋影元鈔本『歴代蒙求』に「元本」という印が捺されているところから推すと、毛晋は必ずしも宋本、元本でなくても、鈔写の原本が宋、元版であるなら、「宋本」「元本」といった印を捺していたと考えられる。とすれば、このテキストの「宋本」印も毛晋の手に渡ったあと、宋本を鈔写したものと判断された結果、捺された可能性があるだろう。

静嘉堂本は、毛本及び新編本に記されている趙均本の本文に関する注と見比べてみると、収録されている詩人の数並びに詩の数は両者と全く同じであるが、詩題や字句に関しては異なる個所が少なからずあり、また「原本」「趙本」といった、毛本や趙均本とはまた別の『御覧詩』のテキストとの異同についての校記も散見する。このような、趙均本、毛本との違いがある静嘉堂本は、『御覧詩』の諸本について考える上で無視することができない、検討する価値のあるテキストと認められよう。

本稿では、南宋以降の『御覧詩』に関する題記などを検討することで、静嘉堂本が具体的にどのような素性のテキストであるのかということを検証し、更に毛本、趙均本との相違を具体的に確認することを通して、このテキストが『御覧詩』諸本のなかでどのような意義をもっているのかを明らかにしてみたい。

二

『御覧詩』は、両『唐書』の令狐楚伝に見えず、また『旧唐書』経籍志をはじめとする正史の書目にも著録されていない。『御覧詩』に関する最も早い記述は陸游（一一二五～一二〇九）「跋御覧詩」（『渭南文集』巻二十六）である。

右御覧詩一巻、凡三十人、二百八十九首、元和学士令狐楚所集也。按盧綸墓碑云、元和中、章武皇帝命侍丞采詩第名家、得三百一十篇、公之章句奏御者居十之一。今御覧所載綸詩正三十二篇、所謂居十之一也。拠此則御覧為唐旧本不疑。然碑云三百十一篇[9]、而此纔二百八十九首。蓋散逸多矣。姑校定誤繆、以俟定本。

右『御覧詩』一巻、凡て三十人、二百八十九首、元和の学士令狐楚の集むる所なり。按ずるに盧綸の墓碑に云く、「元和の中、章武皇帝（憲宗）　侍丞に命じて詩を采り名家を第せしめ、三百一十篇を得、公の章句奏御する者　十の一に居る」と。今『御覧』の載する所の綸の詩は正に三十二篇、所謂　十の一に居るなり。此れに拠れば則ち『御覧』は唐の旧本為ること疑わず。然れども碑に三百十一篇と云うも、此れ纔かに二百八十九首なるのみ。蓋し散逸するもの多し。姑く誤繆を校定し、以て定本を俟つ。

陸游が引く盧綸の墓碑は現存しないが、注意しておきたいのは『御覧詩』が元来三一〇篇収録されていたのが、南宋には二一首を缺き、二八九首になっていたということである。陸游の記述に続くものとしては、南宋陳振孫『直斎書録解題』巻十五がある。「御覧詩一巻」の下に、「唐翰林学士令狐楚纂。劉方平而下迄於梁鍠凡三十人、詩二百八十九首」とあり、巻数、収録されている詩人の数及び詩の数が、陸游の跋文と一致しているところからすると、陳振孫も『御覧詩』の完本を見ることはできなかったのだろう。元代には『御覧詩』に触れた記述は無いようであり、明代中期に至り、潘之恒「元和御覧詩序」（『明文海』巻二百三十）に、この書に関する記述が見える。潘之恒は「今観元和御覧詩、其所録僅三十人、進詩不満三百首」と述べてお

り、彼が見た『御覧詩』も完全な形ではなかったことがわかる。

毛本の巻末には陸游の跋文が二条引かれており（うち一条は先に引用）、続けて崇禎元年に書かれた毛晋自身の跋文が載っている。そこで毛晋は「至今缺軼頗多、已無稽考」というだけで、特に何を底本としたのかをいわず、同じく『唐人選唐詩八種』の巻頭に付された魏浣初「唐人選唐詩序」にも底本に対する言及はない。毛晋が用いた底本が何かは定かでないが、ただ毛本に収められている詩人の数が三〇人、詩の数が二八六首であり、そこには盧綸詩三二首が収録され、詩人の並び方が劉方平から始まり梁鍠に終っていることを踏まえると、毛本は詩の数こそ陸游、陳振孫の記述と齟齬があるが、体裁に限って言えば完璧とはいえないまでも南宋期の形が反映されていると想像できる。[10] 趙均本については、「御覧詩前記」から、収録されている詩人の数、詩の数は毛本と完全に一致していることがわかる。[11] 新編本には、趙均本に毛本の「目録」が無いということ以外、詩人の配列の仕方などに関する違いが記されていないことから、本篇に限って言えば両者の体裁に大きな違いはなく、趙均本もまた毛本同様、南宋期旧来の形を残していると考えられる。静嘉堂本も同じく毛本の「目録」が無いこと以外、毛本、趙均本の体裁と一致している。

静嘉堂本に関する解題には、陸心源『皕宋楼藏書志』巻百二十、河田羆『静嘉堂秘藉史』巻四十七があるが、いずれも鈔本と記すだけで、方罫紙の体裁や蔵書印に関する説明はない。また、『四庫提要』などの主な解題もこのテキストについて言及していないのだが、傅増湘『蔵園群書題記続集』巻五[12]に引用されている清何焯（一六六一～一七二二、号は無勇、香案）の跋文には、明末清初に現存した『御覧詩』諸本についての詳しい記述があり、ここにはまた静嘉堂本と密接な関係を持つと思しき馮氏の鈔本についても触れられている。[13] そこで以下、何焯の跋文五則のうち、『御覧詩』のテキストについて述べられている第三、第四、第五則を検証していく（括弧書きの数字は筆者が便宜的に付したものである）。

（3）戊子冬日、従銭楚殷借得二馮手校本。視昔年徐氏本、又詳加改正。歳月如流、遂二十年。而余於六義仍無所窺、為可歎耳。

戊子冬日、銭楚殷従り二馮手校本を借り得たり。昔年の徐氏の本を視、又　詳らかに改正を加う。歳月流るるが如く、遂に二十年。而れども余　六義において仍お窺う

所無く、為に歎くべきのみ。

(4) 戊辰春日、銭簡臣従其友徐聖階借得前輩魏叔子、馮定遠照宋刻校本。従之改定数処、其可疑者側注於旁。無勇生記。

戊辰春日、銭簡臣　其の友徐聖階より前輩の魏叔子、馮定遠の宋刻に照する校本を借り得たり。之に従りて改定すること数処、其の疑うべき者は旁に側注す。無勇生記す。

(5) 初余得聖階校本、稍為改正汲古閣刻訛字、而毛丈斧季堅執虞山前輩皆未嘗有(原缺二字)校定。康熙戊子、過虞山、趙安成以孫岷自録本見贈。後題云、馮定遠空斎校本本於趙清常、後従半臨堂借臨安本校一過。定遠云、臨安旧刻亦非佳本、姑両存之。始知聖階非作偽欺人者。次日訪之銭楚殷。楚殷出馮已蒼家写本、後有定遠観(原缺三字)太歳戊寅元宵重勘是為大歴(ママ)間体。然後所疑尽釈、因詳記於巻末。庶後来得余此書者、亦有可徴信也。十月朔日灯下、香案何焯書。

初め余　聖階の校本を得、稍や汲古閣の訛字を刻するを改正するを為すも、毛丈斧季は虞山の前輩に堅執し皆未だ嘗て校定すること有らざるなり。康熙戊子、虞山を過りしとき、趙安成　孫岷自の録本を以て贈らる。後題に云く、「馮定遠空斎校本は趙清常に本づき、後に半臨堂より臨安本を借り校すること一過。定遠『臨安の旧刻も亦　佳本に非ず、姑く両つながら之を存す』と云う」と。始めて聖階の偽を作し人を欺く者に非ざる者なるを知る。次日　銭楚殷を訪ね之く。楚殷　馮已蒼家の写本を出し、後に「定遠観太歳戊寅元宵重勘是為大歴間体」と有り。然る後　疑う所は尽く釈し、因りて詳らかに巻末に記す。庶わくは後来の余の此の書を得たる者は、亦徴すべき信有るなり。十月朔日の灯下、香案何焯書す。

まず、以上の三則に記されている年に注目しよう。何焯の生卒年から、第三則、第五則の「戊子」は康熙四十七年（一七〇八）に、第四則の「戊辰」は康熙二十七年（一六八八）にあたることがわかる。つまりこの跋文は時の流れに従って記されていないのである。またこの跋文には『御覧詩』に関係する人物が多数登場しており、内容が非常に複雑になっている。そこで、何焯が何を底本としどのような経緯で『御覧詩』の校勘作業をしていったのかを三則を一括して整理していく。

第五則の冒頭から、何焯が底本として用いた『御覧詩』のテキストが汲古閣本であったことがわかる。第五則には「聖階校本」によって汲古閣の誤刻を改正したとあるが、

この「聖階校本」とは第四則にいう銭簡臣が徐聖階から借りた「魏叔子、馮定遠照宋刻校本」と同一のものを指しているだろう。銭簡臣、徐聖階については不明。魏叔子は寧都の魏禧（一六二四～一六八〇）のことで、馮定遠は先に触れた馮班のこと。「叔子」「定遠」は彼らの字である。「聖階校本」が、魏禧と馮班がそれぞれ別に宋刻本と校合した複数のテキストを指しているのか、それとも魏禧と馮班の校記が共に掲載されている単一のテキストなのか、こうした疑問を知る手掛かりが何焯の跋文に無い以上、これが具体的にどのようなテキストなのかは不明とせざるを得ないが、ともかく何焯はまず一六八八年春に、「聖階校本」によって汲古閣本を改定したということ、また「聖階校本」に対し疑問を持っていたということを、ここではひとまず押えておこう。

その二十年後の一七〇八年冬、何焯は虞山に立ち寄ったとき、趙安成から「孫岷自録本」を入手する。孫岷自は明嘉靖期の蔵書家孫楼の玄孫、孫江（？～一六六五）のことで岷自は字、常熟の人である。「孫岷自録本」とは、孫江の「後題」によると「馮定遠空斎校本（空斎は馮班の書斎）」を孫江自身が鈔写したものであることがわかる。この「馮定遠空斎校本」は趙清常、すなわち常熟の趙琦美（一五六三～一六二四）本[14]と半臨堂[15]という人物が蔵する「臨安本」を用いて校合したテキストであり、馮班が「臨安旧刻亦非佳本、姑両存之」と述べていることからすると、これには趙琦美本と臨安本の二本に関する校記があったはずである。また、何焯が「孫岷自録本」をみたことで「聖階校本」が偽物ではなかったと確信していることは、「聖階校本」が馮班自身の手によるものではなかったことを示唆しているだろう。「孫岷自録本」を入手した次の日、何焯は、第三則にもみえる銭楚殷の家を訪問して「馮已蒼家写本」をみる。銭楚殷は常熟の銭沅のことで楚殷は字。『重修常昭合志』巻三十二に、蔵書家銭曽（一六二九～一七〇一）の子と記されている。[16]馮已蒼は馮舒のことで已蒼は字。第三則に見えていた「二馮手校本」とは、ここにいう銭沅が出してきた「馮已蒼家写本」のことだろう。「馮已蒼家写本」の末尾に載る題記をみて、何焯が全ての疑いが解けたというのは、「聖階校本」にせよ「孫岷自録本」にせよ、馮班の写本を底本として書写された重鈔本だったからであり、二本の底本であった馮班の原本そのものを、ここではじめてみることができたからだったに違いない。かくして、何焯は第三則にいうように、銭沅から「二馮手校本」すなわち「馮已蒼家写本」を借り、「徐氏本」（これは

「徐聖階校本」によって改正した汲古閣本を指しているのだろう）に改正を加えるのである。

ところで、「馮已蒼家写本」の末尾に記されていたという「定遠観（原缺三字）太歳戊寅元宵重勘是為大歴間体」のうち、「太歳」から「間体」までの一四字が、実は静嘉堂本の本篇五七葉裏に朱筆で記されているのである。[17] 更に、ここに見える「原缺三字」という四字は、先に見える「嘗有」の二字に付された「原缺二字」と同じ人物が記したもので何焯自身の注記ではないことは確かだから、何焯が見た後題には「定遠観」の三字を缺く一四字だけが記されていたはずである。従って、静嘉堂本と何焯の跋文に引用されている「馮已蒼家写本」の後題は一致していると考えられ、このことは両者が同一のものであるという蓋然性を非常に高めるものである。ただ、何焯が第三則で「馮已蒼家写本」を「二馮手校本」と言い換えていることには注意しておく必要があるだろう。普通「二馮」とは馮舒、馮班兄弟を意味するが、静嘉堂本には特に「二馮」に関する記述がなく、先に触れたように彼らの弟馮知十の蔵書印が見えるだけだからである。何焯の跋文を踏まえて静嘉堂本をみると、このようないくつかの疑問が依然として残ってしまうが、静嘉堂本が何焯のみた「馮已蒼家写本」と密接な関わりをもつテキストであることは疑いない。重要なのは、静嘉堂本が馮班手校本と密接な関わりを持っている以上、これが間違いなく宋本の形を残しているという事実である。

このように何焯の跋文によって、静嘉堂本が、馮班自身の手による鈔校本であるという蓋然性が極めて高いことが明らかになったと思う。

三

何焯の跋文に引かれている孫江「後題」によると、馮班鈔校本には臨安本と趙琦美本の二種の校記が記されていたことが確かめられたが、実際、静嘉堂本には「趙本」「原本」（「趙」「原」と略している個所もある）という、趙琦美本と臨安本に比定することができそうな二種の校記が見える。この一致は、静嘉堂本が馮班鈔校本であるという蓋然性を更に高めるものである。以下では、静嘉堂本に記されている、こうした校記などを検討することで、静嘉堂本と何焯の跋文に引かれていたテキストとの関係について考えてみる。

孫江「後題」に「馮定遠空斎校本本於趙清常」と述べていることからすると、馮班鈔校本は、はじめ趙琦美本を底本としていたとひとまず認められそうである。静嘉堂本の

校記のうち、「趙本」に関するものは一八条あり、これらの中には孫江のいうように趙琦美本を底本としていたということを裏付ける例がいくつかある（以下、静嘉堂本の本文を引用する際、馮氏が校勘の対象としている字を太字にし、馮氏の校記を《馮校》と示す）。

故國歌鐘地、長橋車馬塵。（李益「揚州懐古」）

《馮校》園趙作國。

黒で書かれた「國」の右横に朱で「園」と記されている。馮氏はどのテキストによって「園」と訂正したのかを明言していないが、「原本」によって字を改める場合いずれも朱を用いているから、この「園」の場合も同じく「原本」に従っているのかもしれない。このような、本文に黒で書かれている字が、馮氏の校記にいう趙本と同じ字となっている例は、訂正された字が右に添えられているものや或いは重ねがきされているといった体裁の違いはあるが、他に五条ある。しかし一方で、こうした見方を是正しなくてはならない例がある。

天子方清**署**、宮娃起曉粧。（盧綸「天長詞」〈其二〉）

《馮校》署趙本作暑。

「署」は胡粉で訂正された跡がなく、特に「原本」に関する校記もないから、これは静嘉堂本に用いられた底本が「趙本」ではなかったことを示すものである。このような例が他に一条あり（盧綸「曲江春望」の「泉」字）、これらは確かに静嘉堂本が当初「趙本」に基づいて鈔写されたテキストでは無かったことを裏付けている。このことは、孫江「後題」の記述と一致しない事実であるが、馮班自身の「臨安旧刻亦非佳本、姑両存之」という、臨安本と趙琦美本に関する校を記したということを意味する発言と齟齬することにはならないだろう。静嘉堂本が何を底本としたのかは不明と言わざるを得ないが、少なくとも毛本、趙均本ではないことは三本を比較することで確かめられる。[18] 従って静嘉堂本にいう「趙本」が「趙琦美本」であると見なしても、ほぼ間違いないだろう。

次に、新編本に載る何焯の校記一三条のうち「宋本」と記されている五条の校記と静嘉堂本を見比べることで、静嘉堂本が宋本の形を残しているのかどうかを確認していく（以下、毛本の本文を引用する際、何焯の校勘の対象となっている字は太字で示し、何焯の校記を《何校》と表す）。

（1）**明**朝戯去誰相伴、年少相逢狭路間。（劉復「夏日」）

《何校》宋本作時、今呉語猶有時朝月節之語。

静嘉堂本は「明」を「時」に作るが字の右に朱引きがあり、その上の校記に「時疑昨」と記されている。

（2）閨情

《何校》合前一首、宋本俱作送友人。

この何校は、李端の「閨情」という詩題に付されたものである。つまり何焯のいう「宋本」では、「閨情」という詩題がなく、「閨情」以下の詩が「閨情」の前に載る「送友人」の〈其二〉として収められていたのであろう。静嘉堂本は胡粉で「閨情」の二字を消し、その上の校記に「原本無空行」と記している。

（3）

長門怨劉長卿原有二首、逸去其一、反入女郎劉媛作。今姑仍旧本、附載原詩辨誤。

蟬鬢慵梳倚帳門、蛾眉不掃慣承恩。傍人未必知心事、一面残粧空涙痕。

又宮殿沉沉月欲分、昭陽更漏不堪聞。珊瑚枕上千行涙、不是思君是恨君。

雨滴長門秋夜長、新愁和雨到昭陽。涙痕不共君恩断、拭却千行与万行此首劉媛作。

《何校》宋本不載、亦不言第二首為劉媛作也。

「長門怨」、「又」「万行」以下にみえる小字二行の校は、毛晋が記したものである。「又」以下で毛晋が引用している詩は『文苑英華』巻二百四、『唐詩紀事』巻三十六に同じ題で載っている。この何校は毛晋の「此首劉媛作」という五字に対して付されたものである。静嘉堂本は毛晋所引「宮殿沉沉月欲分」に始まる「長門怨」を引かず、特に劉媛の作であるということにも触れていない。

（4）紫蘂叢開未到家、却教遊客賞繁華。（李益「牡丹贈従兄正封」）

《何校》宋本作貴年華。

静嘉堂本は、何校のいう「宋本」と同じく作るが、「貴年」の二字は胡粉の上に黒筆で書かれたものであり、「貴」の下には仄かに「賞」字が見える。「年」の下はよくわからないが、あるいは「繁」と書かれていたのかもしれない。

（5）幾処野花留不得、双双飛向御爐前。（楊巨源「宮燕詞」）

《何校》宋本作煙。

静嘉堂本は「前」を「煙」の異体字である「烟」に作っている。なおこれは胡粉で訂正されたものであり、その下には「首」と思しき字がみえる。また、静嘉堂本は詩題を「宮燕詞」に作る。

新編本には以上に見てきた部分について、特に趙均本との異同が記されていないから、趙均本は毛本と同じ形になっているはずである。とすれば、何焯のいう「宋本」と同じ字、詩題、詩の配列の仕方を残しているものは独り静嘉

堂本に限られる。

このほか宋本に関わるものではないが、注目すべき何焯の校記として、「姓氏目録」にみえる李端「送客赴洪州」に付されたものがある。何焯はこの「洪」について「洪作荆」と記している。趙均本、静嘉堂本には詩題目録が無いのだが、本篇の方を見ると趙均本は毛本と同じく作っているのに対し、静嘉堂本は何焯のいうように「荆」に作る。新編本はこの何校について「未注所拠」というが、何焯は静嘉堂本によって「洪作荆」という校を記したのかもしれない。

また、静嘉堂本が宋本の形を残しているということは、目録に記されている詩の数からも窺える。先に触れたように趙均本、毛本、静嘉堂本の三本が収録する詩の数はいずれも二八六首なのだが、実は「姓氏総目」の詩人名の下に付された詩の数には違いがある。静嘉堂本の目録は「鄭錫十一首」「李益三十七首」「楊憑十九首」となっており、趙均本、毛本よりも各一首ずつ多くなっている。[19] 静嘉堂本の目録によると、詩の数の合計は二八九首となり、当に陸游「御覧詩跋」にいう詩の数と一致する。「御覧詩前記」は詩の数について、「値得注意的是、無論趙均抄本或是汲古閣本、所収詩人数及詩篇数都相同、即三十人、二百八十六篇。覆核陸游跋及陳振孫著録、詩人人数相同、而詩則少三篇、並非二百八十九篇。這究竟是到明代又少了三篇、還是陸・陳所記即已有誤、不得而知」と述べるが、静嘉堂本の目録は、すでに南宋期の目録上に誤りがあり、詩の数は当時から変っていなかったことを想像させる。

静嘉堂本は、何焯のいう「宋本」の形を残しているのみならず、(3) に挙げた例からわかるように、毛晋のいう「旧本」の体裁を保っていることも確かめられる。(3) の例以外にも、毛本には本篇の「李何」の下に、小字二行に亙って「旧刻和非（旧　和に刻するは非なり）」という『御覧詩』旧本に対する言及がみえる。新編本はこの毛晋の校記について、「趙校本無此四字。按李何、『唐詩紀事』未載、『全唐詩』列巻七六九世次爵里無考類、僅載此一首、当即採自『御覧詩』」[20] と述べている。静嘉堂本の目録は「李何」に作るが、もとは黒筆で「李和」と記されており、「和」が朱で「何」に改められている。一方、本篇の方では、二字ともに黒筆で「李何」と記されているが、「何」は胡粉で訂正された上に書かれている。胡粉の下の字は定かでないが恐らく目録と同じように「和」と記されているに違いない。静嘉堂本には、この二条に関する注記が見えないから、何によって「和」が「何」に改められたのかは

定かでないが、毛晋のいう「旧本」の形がここにも保たれていることが確認できる。

まとめ

以上の検証から、静嘉堂本は宋校本及び趙琦美本と校合した馮班のテキストと密接な関係を持つものであり、字句に関しては趙均本、毛本よりも「宋本」元来の形を保っているということが確かめられた。また静嘉堂本によって、毛本や趙均本の詩の数が南宋時代の記述と齟齬しているのはなぜか、という問題が解決できた。

本稿の考察を通じて、静嘉堂本が『御覧詩』の諸本を考える上で、無視できない、重要なテキストであることが明らかになったと思う。

注

①『御覧詩』を部分的に扱った先行論としては、小川昭一「唐人選唐詩について」(『全唐詩雑記』彙文堂書店、一九六九)、中沢希男「唐人選唐詩攷」(『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編第二二巻、一九七二)、加固理一郎「令狐楚について―その交遊関係を中心に―」(『中国文化』四五号、一九八七)などがあるが、いずれも『御覧詩』の諸本に関する詳細な言及はない。

②本稿で取り上げている明清代の文人はいずれも江南の人であり、生卒年を記すにあたっては張慧剣『明清江蘇文人年表』(上海古籍出版社、一九八六)に従った。

③汲古閣本は、一九七三年に台湾大通書局から、国立中央図書館所蔵本が影印出版されている。本稿で汲古閣本を引用する際にはこれを用いた。

④『北京図書館古籍善本書目』(書目文献出版社、一九八七)集部、総集類に「唐人選唐詩八種二十三巻　明毛晋編　明崇禎元年毛氏汲古閣刻本　傅増湘校跋並録何焯批校題識　二十冊」とある。

⑤なお、『中国古籍善本書目』(上海古籍出版、一九九八)には、毛本に校注や評点を付したものとして、新編本が底本としたもの以外の四種の本が記載されている。以下に校閲した人物、並びに所蔵場所を記しておく。(1)清陸貽典校。上海図書館所蔵。(2)清王士禎評点。桂林図書館所蔵。(3)清何焯批校。上海図書館所蔵。(4)清呉景恩校跋、清葉奕、陸貽典、何焯等批校題識。北京図書館蔵。以上に示したものはいずれも筆者未見である。

⑥四庫全書本の底本は『四庫採進書目』補遺、武英殿版第一次書目に「唐人選唐詩八種、二十三巻、明毛晋編刊」とあるから汲古閣刊本であることがわかる。ただ、四庫全書本と毛本とを見比べてみると四庫全書本には毛本に載る「姓氏総目」(詩人名と収められている詩の数を記した目録)、「目録」(詩人名と

詩題を載せた目録）及び陸游と毛晋の跋文が無いといった違いがある。また和刻本は「姓氏総目」及び陸游、毛晋跋文が無いこと以外、毛本と一致している。

⑦以下、印記を解読する際には主に林申清『中国蔵書家印鑒』（上海書店出版社、一九九七）を参照した。

⑧陳先行『中國古籍稿鈔校本図録』（上海書店出版社、二〇〇〇）「鈔本」三四一～三四三頁に「明末馮氏鈔本」として台湾中央図書館所蔵『支遁集』の三葉が影印されており、この方罫紙が静嘉堂本と一致していることや、「馮彦淵収蔵記」という印が捺されていることが確かめられる。

⑨『渭南文集』、毛本ともに「三百十一」に作り、盧綸の墓碑にいう「三百一十」と一致しないが、静嘉堂本は胡粉で訂正した上で「三百一十」に作っている。

⑩なお、『四庫総目提要』も「此本人数、詩数均与游所跋相合、蓋猶古本」と、毛本が旧来の形を反映しているだろうと指摘する。

⑪「値得注意的是、無論趙均抄本或是汲古閣本、所収詩人数及詩篇数都相同、即三十人、二百八十六篇」とある。

⑫『蔵園群書題記続集』は、一九三七年に傅増湘が自費出版したものである。本稿ではこの影印本（台湾広文書局、一九六七）を用いた。

⑬『蔵園群書題記続集』は新編本が底本としたものに載る傅氏の跋文を転載したものであり、また傅増湘が見た何焯批校本とは注⑤の（3）を示しているだろう。

⑭原名開美、字は元度、号は清常道人、脈望館蔵書楼の主人。

⑮「御覧詩前記」には、この何焯跋文に対する傅熹年氏（傅増湘の孫）の見解が載っており、そこで氏は半臨堂については不明と述べている。

⑯葉昌熾『蔵書紀事詩』（上海古籍出版社、一九九九）三四六頁には、牧翁「遵王四子字序」に銭沅の名が見えないことから、銭曾の子であるということに対し疑問が提示されている。

⑰静嘉堂本は「歴」を「暦」に作る。

⑱例えば、盧綸「春日登楼」の結句が三本それぞれ異なる形に作っており、こうした例がいくつかあることから、静嘉堂本は趙均本、毛本を底本としていなかったことがわかる。

⑲静嘉堂本の本篇には、楊憑の部分に校記はないが、鄭錫、李益の部分では、その上の校記に藍筆でそれぞれ「十首」「三十六首」と訂正されている。

⑳明末の季振宜、銭謙益『全唐詩稿本』では、李何「観妓」一首を引用する際、『御覧詩』を用いておらず、版心に「古今以鈔書為風流罪過」と刻する鈔本を引用し「李何」に作る。この鈔本が誰の手によるものかは不明だが、李何の詩を引用する際に『御覧詩』ではなくこの鈔本から引用してきていることからすると、この鈔本は毛本よりも古かったのかもしれない。

（筑波大学大学院）